川崎歴史ガイド

二ケ領用水

財団法人　川崎市文化財団

二ケ領用水

●田植えと刈りとりの風景(宿河原あたり)。

総延長三二キロ。二ケ領用水は現在の川崎市のほぼ全域を流れる神奈川県下で最も古い人工用水です。二ケ領というのは、この用水が江戸時代、川崎領と稲毛領にまたがっていたことに由来します。

昔の多摩川は、洪水を繰返しては田畑を流す荒々しい川でした。多摩川の水を利用するには、堤防を築き、必要な量だけ水を引入れてくる農業用水の建設が是非とも必要だったのです。

徳川家康から江戸近在の治水と新田開発を命じられて代官小泉次大夫(じだゆう)が用水の建設を始めたのは慶長二(1597)年のことでした。次大夫は、川崎領に入ると直ちに測量の杭打ちを開始し、対岸の六郷用水の建設と並行して工事の指揮をとりました。

工事は困難を極め、多数の農民たちが動員されました。小杉に陣屋を構えた次大夫は、工事の士気を高めるため女性も労役に参加させたことからこの用水を女堀とも呼んでいます。また、流路の決定にあたっては、できるだけ自然条件にさからわず、古い流路や蛇行の跡を利用し、夜になるとかがり火をたいて用水の高低を測るなど多くの苦心が払われました。こうして、実に一四年という長い年月を経て、この用水は慶長一六(1611)年ようやく完成したのです。この用水の完成により、米の収穫量は飛躍的にのびていきました。

もう一人、二ケ領用水に関して忘れてはならない者がいます。「川崎宿中興の祖」といわれた田中休愚です。小泉次大夫にとって完成された用水もその後百年あまりを経た頃には、いたるところで欠損し、かなり荒廃した状況になりました。休愚は、用水の本格的改良工事をおこない、死に瀕していた二ケ領用水を再び「恵みの用水」にかえ、以後の農業に計り知れない貢献をした人です。

ところで、川崎・稲毛領の農民にとって唯一の水源であるこの二ケ領用水をめぐって激しい水争いが絶えませんでした。用水流域の村々では、堰や堀を単位に用水堀組合をつくり、幕府の指示に従って各堰ごとに取入れる水量を決めていたのですが、文政四(1821)年の溝口水騒動に代表されるように、一度水不足になると文字どおりの我田引水が横行し、水争いは幾度となく繰返されたのです。

明治以後は、二ケ領用水から取水する横浜水道が開設されたり(明治6年)、また工場が進出するようになると工業用水として利用されたり、本来の目的である農業用水以外の利用もめだつようになりました。

しかし、それにしても昭和8年の小河内ダム建設を巡る論議、昭和16年の円筒分水の完成など、江戸時代から延々と現代に至るまで、農民たちは川崎の農業のために二ケ領用水を守り続けてきたのです。

戦後急速に進んだ都市化、農地の減少、用水の水質悪化などによって、今では用水の利用もほとんどなくなりつつありますが、川崎にとってかけがえのない歴史をもつこの用水を、もう一度みつめ直し、現代の市民生活を潤す新しい水の流れにつくり変えていきたいものです。

稲田堤の桜

明治31年、菅村の人たちが日清戦役の勝利を記念して稲田堤に植えた二五〇本あまりの桜。用水取入れ口から矢野口境まで、およそ二キロにおよぶこの桜並木は、次第に成長し、やがて、東京近郊の王子の飛鳥山や小金井堤の桜と並ぶ花見の名所となりました。昭和の初め頃には、東京などから何万人という花見客が訪れ、大いに賑わったものです。

文化人も多く訪れました。昭和5年に北原白秋が作詞した多摩川音頭の一節には「咲いた咲いたよ　稲田のさくら　時は世ざかり　時は世ざかり　花ざかり」とうたわれています。また、若き日の古賀政男が明治大学マンドリン倶楽部の学友とピクニックに来た時の印象が、有名なヒット曲である『丘を越えて』のメロディーになったことは今もなお語り伝えられてるところです。

多摩沿線道路の拡幅工事によって、わずかに面影をとどめていた桜がすっかり姿を消してしまったのは昭和43年のことでした。

●多摩川からの取入れ口。

●稲田堤の桜のあと（下の写真と同じ付近）。

●稲田堤の桜（昭和23年）。

中野島取入れ口（上河原取入れ口）

全長約三二キロに及ぶ二ヶ領用水が難工事の末に完成したのは慶長一六（1611）年でした。初め、水はすべてここから取り入れられていました。現在はコンクリートの堰ですが、当時の中野島取入れ口は、竹を編んでつくられた細長い蛇籠に玉石を入れていくつも並べ、流れをせきとめるというものでした。

上質米として人気を博した稲毛・川崎領の米の生産量は、この用水の完成によって飛躍的にのびました。江戸中期には、川崎全体で、五百町歩から二千町歩に増加したという記録が残っています。

ところで、中野島と宿河原のうち、どちらが最初に開設された取入れ口か、工事の明確な記録が残っていないこともあり古くから議論の的でした。しかし現在では、用水の流路となっている多摩川の旧河道や地形などの関係から、中野島であるとするのが一応の有力な説になっています。

●中野島取入れ口の蛇籠堰（昭和初期）。

大丸用水

二ヶ領用水以外にも多摩川から水を引いたいくつかの用水がありました。そのうちの一つが大丸用水で、総延長十キロ。大丸村（現在の稲城市大丸）から長沼、矢野口を経て、菅、中野島の村々を潤していました。ところで、中野島へ水を送るにあたっては、二ヶ領用水を越えていく必要があります。このため、中野島橋付近では、大正の中頃まで樋を使った用水の立体交差が見られました。

中野島村は、この用水の末路にあたるため、旱魃の時など、水をめぐる争いがたえなかったようで、それをいましめる幕府の通達が寛政五年の中野島五人組帳に記されています。「旱水の節理不尽に切りとりまじく候、番水はときを違わず順々に掛け引き仕るべく候、（中略）」。現在でも、稲城市では、この用水が使われていて、わずかに当時の面影を伝えています。

●用水を使った染物業。

●紺屋前堰の水門柱。

紺屋前の堰

中野島から取入れられた多摩川の水は、ここ紺屋前の堰に至り、ここから新田堀、高田堀、水車堀、東堀、鮒堀などに分れて登戸一帯の耕地を潤しました。昭和38年の水系統合により使われなくなるまで、およそ三百年間も利用されていた堰です。この堰が開設された後、登戸一帯の村々では、江戸の発展によって、米作の他に多数の農産物や商品生産が行われ、農村の大きな収入源になりました。堰の名として残っている「紺屋」も用水を利用した藍染屋が近くにあったことに由来します。

上流には、現在でも使われている一本入りの堰（通称草堰）があります。その堰周辺には、都市化が進んだとはいえ、まだ多くの農地が残っています。そこでつくられているのは水稲と梨。とりわけ梨は、長十郎の発祥地である大師河原から登戸・中野島村一帯に生産の中心が移り、昭和60年には、年間一、六三〇トンで川崎の特産物の一つになっています。

●梨畑。

●和紙をつくるのに使われたトロロアオイ。

登戸付近の紙漉き

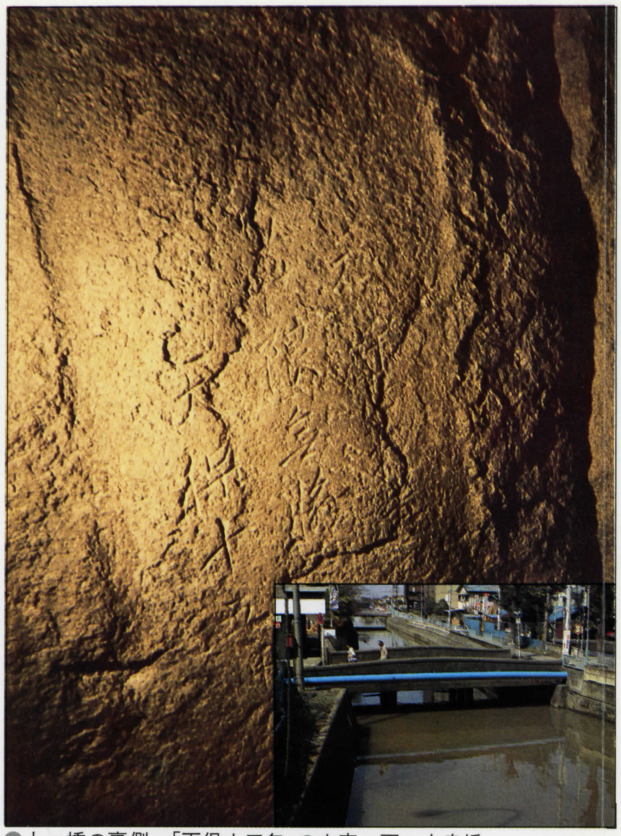
大正の頃、登戸付近には豊富な地下水を利用した紙漉き業が十数軒ありました。紙漉きといっても古紙からの再生紙が主でした。

▼原料となる古紙を東京から仕入れてきて選別する▼ごみや土を取り除いたあとカセーソーダを加えて大釜で煮る▼翌日それを白に入れてつく▼何度も水にさらして墨ぬきをする▼漂白剤を入れた水に一晩晒す▼漂白剤を洗い落してネリを入れる。ネリ（とろろあおいという草の根）は、初め長沢あたりの農家から仕入れたが、後にそれだけでは足りなくなって、主として高座郡の鶴間から仕入れた▼漉き舟にうつし、竹の簾ですくいあげながら漉く▼最後に、漉いたものを張り板に張って天日で干す。

仕上った紙は手車に積まれ、東京・音羽の紙問屋に納められました。それらの紙のうち、薄くて上等な紙は桜紙と呼ばれ、高級品として東京の上流婦人たちや花柳界に使われ、また、村の若い衆が、祭りのかさぼこの花を作るのにも使われました。

しかしその後、機械漉きに押されて手漉きの桜紙の需要も減少し、関東大震災を境にほとんど見られなくなりました。

●上河原親水公園内の草堰。



●上＝橋の裏側、「天保十五年」の文字。下＝小泉橋。

二ケ領用水と小泉橋

津久井道を西に進むと、小泉橋で二ケ領用水を渡ります。この用水は徳川家康の命により、多摩川水系最古の農業用水路として慶長一六(1611)年に完成されたものです。

小泉橋がかけられたのは天保一五(1844)年。土地の豪農小泉利左衛門が登戸にかけた三十三にのぼる石橋の一つです。明治33年になってこの橋を改修したのは、四代後の小泉弥左衛門という人。古い石橋を生かしながら今のような形につくりかえたもので、橋の裏側にはこうした歴史を物語る天保、明治の両碑文が彫られています。

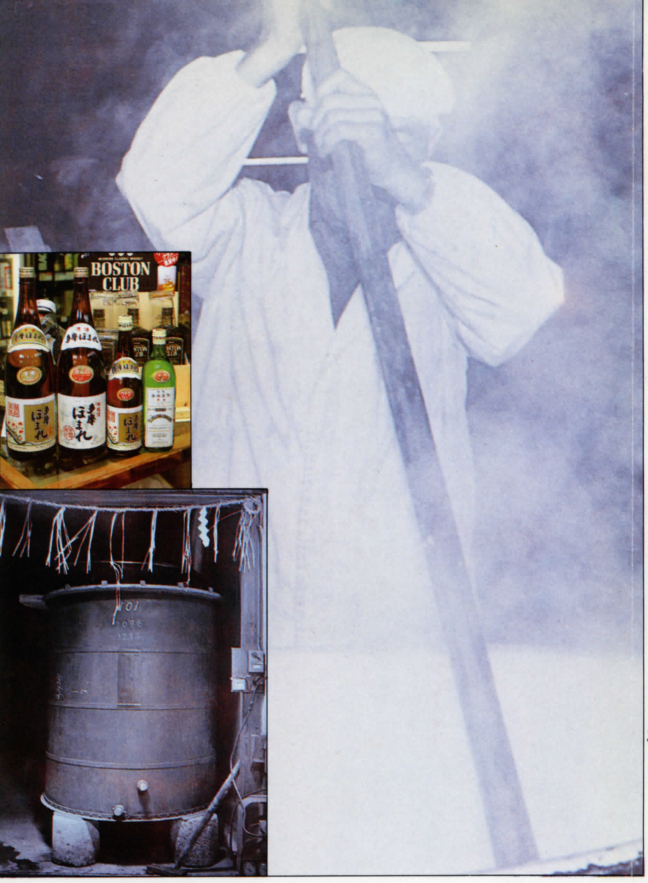
府中県道と交わるこのあたりは、また、丘陵地への出入口でもあり、交通の要所として繁華な所でした。橋の付近には二つの銀行がたち、石橋銀行は大正の初めまで、また明治30年代に弥左衛門が創立した第三十六銀行稲田支店は昭和の初めまで続きました。

小泉橋は、その昔丸山講中が富士登拝する時の集合場所でもありました。橋のたもとにある大きな庚申塔には、丸山教という名のもとになった⑪の印が見られます。

榎戸の堰

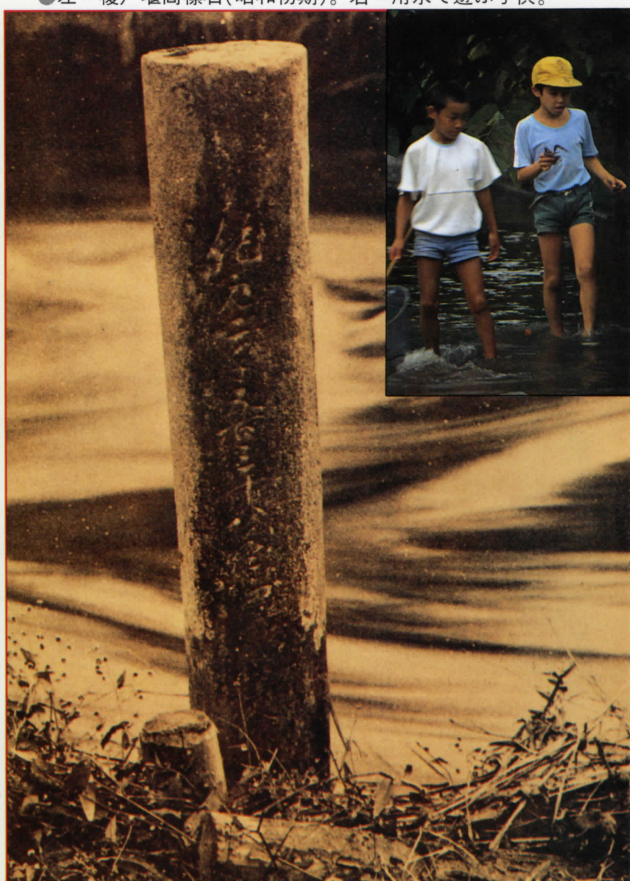
用水は、紀の国屋付近で第三の堰である榎戸の堰にさしかかります。この堰は、上流の草堰（一本入りの堰）、紺屋前の堰とともに、水争いをなくす目的で享保二(1717)年幕府が定めた「分け水の作法書」によって取り入れる水量が決められていました。それによると、「五反田村内榎戸堰　堰高改め分五尺五寸の印まで」で、ここ榎戸の堰は、川底から五尺五寸（一、六五メートル）までの高さと決められていたわけです。

この堰からは、五ケ村堀、中田堀、逆さ堀が取入れられていました。その頃の堰の築き方は、枝のついたままの青竹の先を流れの方向に束ねて川底に伏せ、それを杭と蛇籠で固め、水量を調整するというものでした。今日のように、取入れ口の水門がコンクリート化されたのは大正末期のことです。こうしてつくられた堰は小魚にとって格好のすみかとなり、夏に堰の取り替え工事をすると、鰻や鯰がおもしろいようにとれたものでした。



●酒づくりと川崎の地酒。

●左＝榎戸堰高標石(昭和初期)。右＝用水で遊ぶ子供。



川崎の地酒

川崎で本格的な酒づくりが始まったのは天保年間のことですが、当時は酒といっても濁酒（どぶろく）が中心でした。酒の主流が清酒に変わり、需要も大きく増加したのは大正10年頃からのことです。

第二次大戦が激しくなるにつれて、企業整備が進められ、昭和18年には市内でも有力な造り酒屋であった長尾の鈴木氏、溝口の岩崎氏、二子の大貫氏が合併。後に北加瀬の金子氏もこれに加わって現在に至っています。ここでの酒づくりは、長野県などで収穫される酒専用米を使い、水は最適といわれる地下三十メートルの多摩川の伏流水が利用されています。

毎年、新米収穫後の十二月中旬から三月中旬までが酒づくりの時期。この頃になると、酒づくり全体を取り仕切る「杜氏」をはじめ、頭役、麹屋、釜屋などと呼ばれる職人が新潟県からやってきます。一冬に、一升瓶にして約十六万本が仕込まれ、正月には、「多満正宗」、「多満ほまれ」の銘柄で市内の酒屋に出まわります。

長尾の天然氷

向ヶ丘遊園地から下げ綱松にかけて、日当りの悪い山かげを利用し、天然氷をつくっていた時代があります。農家の副業として始められたもので、明治20年頃から山かげには、水田のような氷溜めがいくつも並んでいました。

冬、とくに寒さの厳しい時期を見計って、用水からくみ上げた水を氷溜めに張ります。三日ほどして氷の厚さが七、八センチ位になると、切り出して氷倉に入れて、おが屑にくるんで、夏まで貯蔵したものです。

夏になると、質の良いものは食用氷として、残りは冷し氷として売られました。馬力に積んで東京の神田・龍閑町や八丁堀、芝・明舟町などの販売所へ、ずっと後には玉川電車を使って渋谷の天然氷販売所などに卸されたといいます。その頃、東京市中で売られた天然氷の中でも長尾の氷は質が良く、地元では信州の諏訪湖、北海道五稜郭の氷にひけをとらないと自慢するほどでした。しかし、それも機械氷が出まわるようになった大正10年頃までの話でした。

●天然氷はこの付近でつくられた。

宿河原取入れ口

用水が完成すると、その後はこの用水の恩恵を受けて次々に流域の新田開発が進み、米の収穫量も大きく増加します。一方、用水の末端部では水が不足するようになり、なんとかして全体の水量を増やす必要が生じてきました。しかし、単に中野島取入れ口を拡張したのでは、対岸の六郷用水の取入れ口への影響が大きくなります。そこで考えられたのが、さらに下流の宿河原に新たな取入れ口をつくることでした。このあたりなら地形的にみて多摩川の伏流水も加わり、豊富な水を取入れることができます。関東郡代伊奈忠治の手代寛助兵衛の指揮のもと、寛永六(1629)年にこの新しい取入れ口は完成しました。

●船島稲荷。

近くにある船島稲荷は洪水の守り神で、地元では沓稲荷とも呼ばれています。鷹狩りに訪れた殿様の愛馬の病を治し、褒美をもらった土地の馬医者が、京都の伏見から勧請した稲荷だと伝えられています。いつの頃からか、その故事にあやかって、この稲荷に馬の藁沓を奉納し、馬の健脚を祈るようになりました。また、百日咳除けを願う風習もあります。

●宿河原取入れ口。

●宿河原の桜並木と川崎市緑化センターにある水車。

宿河原の桜並木

宿河原取入れ口から用水の両岸約二キロにわたって桜並木が続いています。四百本余りの染井吉野の桜は昭和33年から二回にわけて植えられたもので、管理にあたっている宿河原堤桜保存会は、昭和54年に続き、60年にも「日本さくらの会」から表彰を受けました。

また、近くにある川崎市緑化センターは、昭和54年、草花や植木について相談に応じながら市内の緑化をすすめる目的でつくられたものです。園内には、もちろんたくさんの花や草木が植えられ、なにかほっとする公園となっています。

ところで、「宿河原」という地名については、河原の比較的広い土地にできた宿（集落）という説などいくつかの話があります。兼好法師の『徒然草』に「宿河原というところにて…」という書き出しで始まる虚無僧の仇討の話がありますが、この話の舞台が今の川崎の宿河原だという人もあります。

●久地合流点。

久地合流点

南武線久地駅の近くで二つの流れが合流しているのを見ることができます。中野島と宿河原で取入れられた多摩川の水は、ここで合流し、長いあいだ稲毛・川崎領を潤してきました。昭和9年から57年までの許可取水量をみると、中野島が約四五万トン、宿河原が約三五万トン、合わせて一日あたり八十万トンとなっています。

ところで、多摩川の上流に東京府が小河内ダムを建設するという話がもちあがったのは、昭和8年のことでした。小河内ダムができれば、下流の川崎が受ける影響は大きく、水を必要とする農繁期に果たして十分な水が得られるだろうかという不安もあって、多くの議論を呼んだものです。翌年、ダム建設の見返りとして東京府は神奈川県に対し、現在の許可取水量を認め、同時に取入れ口にあるコンクリート堰堤の改修工事費用の負担を約束しました。

しかし、様々な事情から実際に宿河原堰の改修工事が完成したのは、昭和24年のことでした。

鷹匠橋

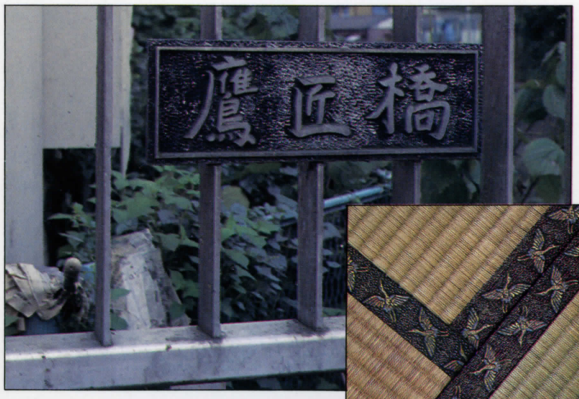
寛永五（1628）年、三代将軍徳川家光によって稲毛・川崎領の各地に将軍家の御鷹場が設けられ、そのうちの一つが今の高津区内にもありました。

御鷹狩りは、毎年秋から冬にかけて行われ、御鷹場に指定された村々では、鷹の餌になる〝けら〟の上納に加え、御鷹御用に対する人夫役の提出、御鷹番所の勤務、鷹匠の接待が義務づけられました。鷹匠たちを迎えるとなると、食事の心配、宿舎の手配などその苦労は大変でした。宿舎となる名主の家には、特別につくられた「御鷹部屋」が設けられていました。鷹匠たちの権勢は、大変なもので、中には座敷に入るのも土足のまま、床の間を背に床几に腰かけ、家人にわらじを脱がせたという話さえ残っているほどです。

「鷹匠橋」という名称も近くにお鷹場があり、鷹狩りに際して、鷹匠や御鷹役人を迎えることに由来しています。

●久地付近の二ヶ領用水。右手は津田山。（昭和初期）

●上・下＝多摩区の旧家に残されている鷹匠部屋。



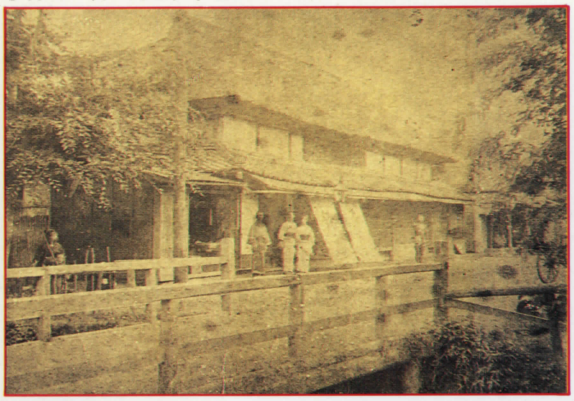
●中＝鷹匠橋。

久地の横土手

久地付近の府中県道と二ヶ領用水が近接する地点から多摩川方向に直角に入る道路があります。そこに立ってみると、道が両側の土地に比べて一段と高くなっているのが今でもよくわかります。この道は、地元では横土手と呼ばれ、江戸時代の中頃築かれた旧堤防なのです。当時は本流からやや離れて堤防を築き、河原を広くとって遊水池を設けたり、重要な地点には、あらかじめ川の流れに直角に横土手を築いておいて、洪水時の水勢を弱めるという工夫がされていたのです。久地の横土手も同じ目的で築かれました。しかし、この土手により下流の溝口、二子などの村々が守られる反面、上流の堰村などでは逆に洪水の危険にさらされることになり、双方の利害は正面から対立することになります。土手の建設をめぐって、ついには、上流部の村に雇われていた侍が工事人を斬る事件まで起り、工事は、約三百メートル進んだところで中止されたままになっています。

●多摩川に向う横土手と馬頭観音。

●明治の頃の丸屋。手前は二ヶ領用水にかかる大石橋。



●円筒分水。

円筒分水

江戸時代、二カ所で多摩川から取入れられ、久地で合流した二ヶ領用水は、「久地分量樋」へ導かれ、そこで、久地二子堀、六ヶ村堀、川崎堀、根方堀に分けられていました。この分量樋は、田中休愚(丘隅)の設計によるもので、堰からあふれ出る流れを、それぞれ異った四つの幅に分け、これにより各堀ごとの水量比率を保とうとするものでした。しかし、この方法ではなかなか正確な分水ができず、それぞれの水量をめぐり「溝口水騒動」など紛争が絶えませんでした。各村々が、堰破りを防ぐため番人を立て、時間を取り決めて取水するという状態は昭和初期まで続いたのです。

現在の円筒分水ができたのは、昭和16年。サイフォンの原理を応用して新平瀬川の下をくぐり、再び吹き上ってきた水を、円筒の切り口の大きさで四つに分ける施設です。農業用水の施設としては、当時の土木技術を駆使したすぐれたもので、これをモデルとした施設が、今でも関東地方を中心に全国約三十箇所の農業用水に使われています。

大石橋と丸屋

江戸赤坂御門にはじまる大山街道が二ヶ領用水と交差する所にある大石橋。江戸時代は文字どおり大きな石橋でした。この橋の北東部に、丸屋・鈴木七右衛門の屋敷がありました。丸屋は江戸時代の中頃から代々溝口・二子宿の問屋役をつとめ、名主を兼ねた家です。昔は、宿場につくごとに馬を乗りかえ、また、新たに人足を雇う「継立て」が行なわれていました。問屋役の主な仕事は、決められた数の人や馬をいつでも用意できるように気を配ること。大きな宿場では、この仕事だけでも大変で、自分の家業がおろそかになった例もあるほどです。しかし、脇街道などでは、宿の規模も小さく、継立ての負担は案外軽いものでした。例えば、溝口・二子宿は、両宿で一日あたり、人足二人、馬一疋という程度でした。そのため、村の有力者が問屋役となり、自分の家を問屋場に使う。同時に名主も兼ねて村の仕事をする。これが、普通だったようです。丸屋もそうでした。丸屋の本業は、「卸問屋」で、秦野のたばこや厚木の麦などを扱い、これはこれで、たいそう繁盛したということです。

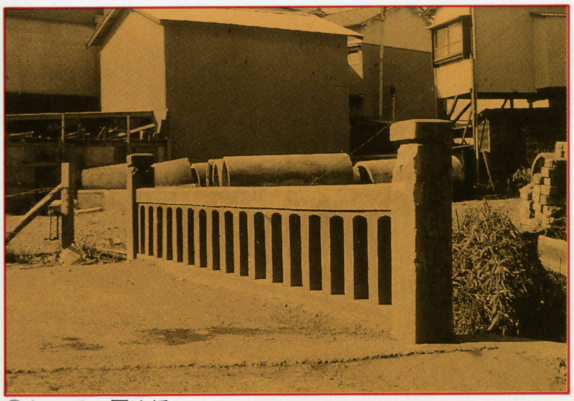
●街道に残る蔵。

●いくつかの造り酒屋もあった。

●今日も二ヶ領用水周辺でみられる白鷺と鴨。

雁追橋

御鷹場に指定された村々では、年貢、助郷役とあわせて野鳥保護が義務づけられていました。溝口村でも明和七(1770)年正月、御鷹匠三宅勘四郎ほか大勢がここに出張し「白鳥、鴨、雁…(中略)、諸鳥殺生は申すに及ばず、あるいは追い立て、おどし申しまじく候」という達しを出しました。白鳥(白鷺)や鴨などの野鳥を将軍の御用とするから追い払ったり、むやみにおどしてはならないということでした。農民たちにしてみれば、年貢に苦しめられながら、汗水流して作った作物が野鳥に食われるのを、将軍の楽しみのために只だまって見ていろというのですからたまったものではありません。そこで農民たちは、役人にみつからないように交替で番をし、季節によっては、人足を雇って野鳥を追い払ったといいます。こうした苦労が「雁追橋」という名にこめられているでしょう。この橋はもとは高津中央病院南側の旧平瀬川にかかっていました。



●かつての雁追橋。

南田の堰

溝口も、明治から大正にかけては豊な田園地帯でした。久地の円筒分水から分流し、最も山側の地域を潤す「根方十三ヶ村堀」が流れていました。現在の横浜銀行溝口支店前の道路がそれにあたります。その頃はもちろん水もきれいでフナやハヤがよく釣れ、子供たちが、竹で編んだ漁具で魚を取って遊ぶ光景があちこちで見られたものでした。

この地区一帯は、小字名を南田といい、この付近を潤していた堰は南田堰(横浜銀行前)と呼ばれていました。

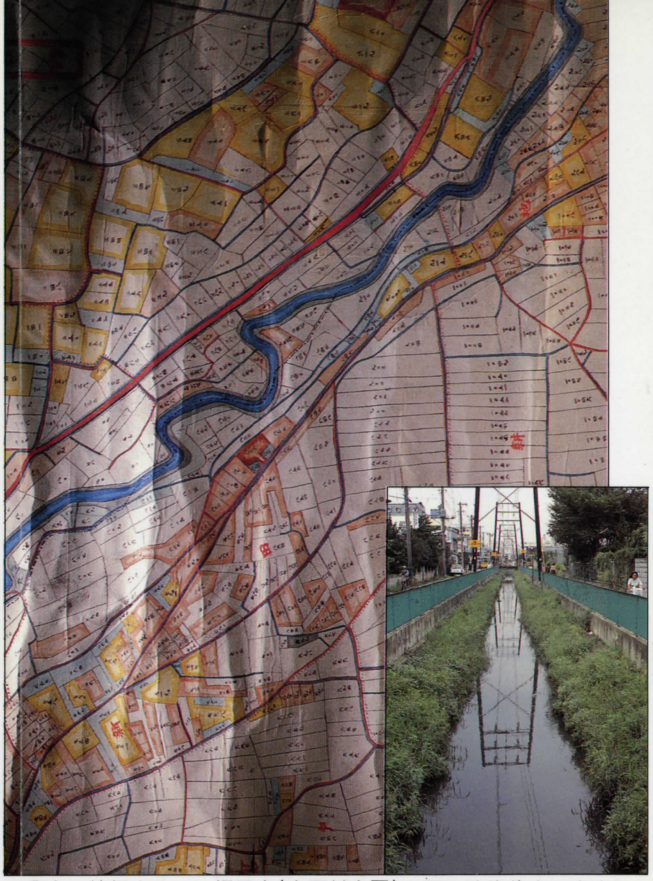
この堰もご多分にもれず水争いの舞台でした。明治も末の頃。春の雨が極端に少ない年がありました。深刻な水不足のなかで思いあまった溝口の農民と地主がこの堰をしめきったのです。そのため、下流の久本、末長の農民が激怒。堰の開放を求めて溝口の地主の家におしかけたという事件の記録が残されています。

八ッ目土と水道水源地

西下橋付近は、蛇行する多摩川の直撃を受け、何回も堤を破られては築き直したところで通称八ッ目土と呼ばれていました。八回目の土手という意味もあるといいます。

この付近は、市内でも水質の良い所で、西下橋から数百メートル行った河川敷には、大正10年に市内で初めて水道がつくられた時の水源地、宮内貯水場がありました。ここで取水した後、戸手の浄水場で浄化し、市内に給水するというものでした。下流の小杉には、昭和3年に完成した中原町営水道水源地跡があります。

ところで、水道ができる前、現在の川崎区一帯は飲み水に恵まれず、用水を汲み上げては各家庭でこして飲料水にしていました。そのため、伝染病が慢性的に流行し、飲料水を売る「水屋」が川崎の名物となったほどです。水道の完成により、大正9年市内に二百名近くもいた伝染病者が大正12年には、一気に二十数名に減少、飲料水の問題もようやく解決したのでした。



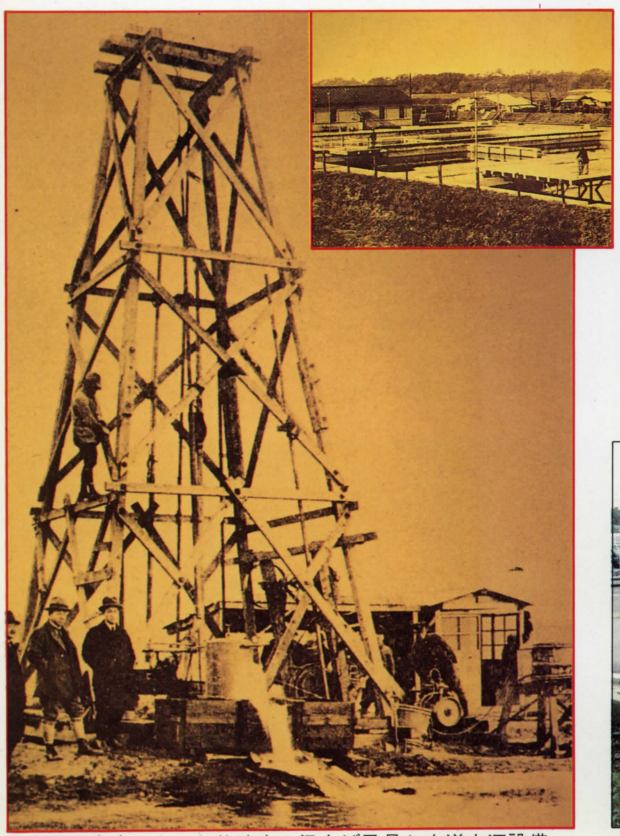
●上＝蛇行する二ヶ領用水（中原村全図）。下＝改修後まっすぐに。

石橋供養塔

二ヶ領用水の本流川崎堀は、溝口を経てここ坂戸に至ります。現在の流路はほぼまっすぐになっていますが、これは、昭和16年に改修されて以降のもので、それ以前は旧平瀬川と合流して曲がりくねった流れでした。その流れの跡が今日の二子緑道になっています。

江戸時代、坂戸村から用水を渡って二子方面に行くための唯一の橋が坂戸橋でした。もとは木の橋でしたが、寛政五（1793）年、土地の荻島利佐ェ門が発願者となって、村民も寄進し、石橋に架けかえられました。橋の完成と同時に建てられた石橋供養塔が、当時の石橋の一部とともに今も二子緑道の入り口に残されています。荻島氏は日蓮宗ですが、村内には浄土宗や真言宗の信徒もいて、供養塔には、橋の安全を祈って左面に「南無妙法蓮華経」、右面に「南無阿弥陀仏」という文字が彫られています。

●石橋供養塔。



●中原区宮内にあった伏流水の汲上げ風景と水道水源設備。

●筆弟201人と刻まれている寿亀堂の墓（高元寺内）。

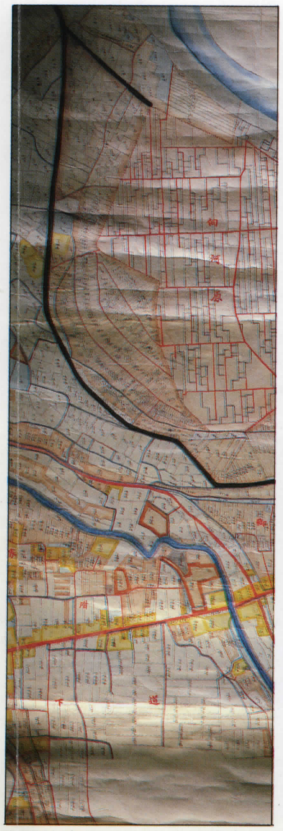
高元寺と寺子屋

覚王山高元寺は浄土真宗本願寺派の寺で、二ヶ領用水の開削の頃にあたる慶長八～一四（1603～1609）年の直前の時期に開かれました。

江戸時代には重要な通路であった中原街道と今の府中道との交差点近くにありました。さらに、府中道と二ヶ領用水に囲まれた寺領（彌陀堂領）をもち帯刀を許されていた家来もいたところから俗称「侍寺」とも呼ばれていました。時には用水をめぐる利水、地境の争いの調停役に住職があたることもあったそうです。またこの寺領は、背後の多摩川と旧堤防、中原街道沿いの西明寺、泉沢寺とあわせて、小杉御殿の守り固めの役割も果していたようです。

江戸時代中期以前から川崎市でも最も古い寺子屋がこの寺に開設され、広い地域から通う武士階層の旧家をはじめ農民、町人の子弟等の教育にあたっていました。寺内に宝暦一〇(1760)年に没した手習い師匠の寿亀堂の墓があり、筆弟二〇一人と刻んであります。

明治5年の「学制」施行直後からこの寺子屋は「宮内学舎」と名づけられ、同7年の調査によると一ヶ月四銭六厘の授業料で生徒数男一五人女三八人計五三人の生徒が学んでおります。



●明治末期の高元寺周辺（中原村全図）

二ヶ領用水と神地橋

多摩川の水は多摩区中野島と宿河原の二箇所から取り込まれ、高津区の久地駅近くで合流し、「久地分量樋」へ導かれていました。ここで四つの堀に水が分けられていたのです。最も多量の水が流された川崎堀はいわば二ヶ領用水の本流で、この本流からさらに細かい堀が分かれていました。上小田中から分れる井田堀、宮内からの木月堀、市ノ坪からの上平間堀などで、これらの用水は、井田、今井、北加瀬など稲毛領の村々を潤していたのです。このあたりでとれた質の良い米は「稲毛米」と呼ばれ、江戸の人々に喜ばれました。

二ヶ領用水本流が中原街道と交差する所に神地橋があります。地名「神地（ごうじ）」は「耕地」からの変化か、あるいは、近くの春日神社の土地「神地（しんち）」が変化したものか、はっきりしません。

昭和12年に橋はコンクリートに変えられましたが、木橋の欄干から用水に飛び込んで泳いだ思い出を語る人も多く、村の子供たちにとって用水は格好の遊び場でもあったようです。

●上＝一時は桃の産地だった。

●下＝かつての神地橋。

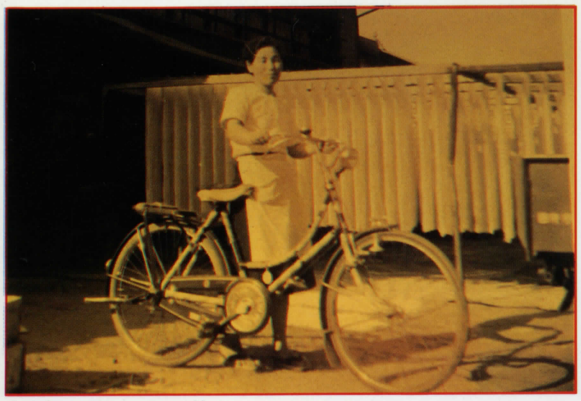
●用水工事を監督する次大夫。

小杉陣屋と次大夫

徳川家康が当初から力を入れたのは、街道の整備と米の増産でした。

当時、多摩川沿いの村々は、川の流れに接しながら水利が悪く、草原、荒れ地、砂礫の河原ばかりで、四、五軒から十軒ぐらいの集落が散在する状況でした。この様子を見て、用水工事による新田開発の必要性を家康に進言し、工事の実施を任されたのが、代官小泉次大夫です。

こうして、慶長二（1597）年、稲毛、川崎（右岸・二ヶ領用水）と世田谷、六郷（左岸・六郷用水）の合わせて四ヶ領に及ぶ用水建設が始まりました。完成まで十四年を要する難工事でした。次大夫は、右岸の小杉と左岸の狛江に陣屋を設け、工事の指揮監督にあたっています。小杉の陣屋は小泉陣屋、後に小杉陣屋と呼ばれ、現在の地名「小杉陣屋町」につながっています。次大夫は、安房（千葉県）小湊の妙本寺から日頃尊敬していた僧日純を招いて陣屋の裏の多摩川べりに妙泉寺を建てています。今も西丸子小学校前の墓所に次大夫の碑が残っています。



●素麺を干している前で。

渋川と水車

中原消防署付近で用水は、渋川に分流します。この付近は、現在でこそ住工混合地帯ですが、明治の頃には、畑と藪が一面に続き、わずか四十戸ほどの家が点々とする小村でした。

その頃、こうした農村風景の中に二ヶ領用水の本・支流を利用したいくつかの水車が回っていたものです。たとえば、嘉永七（1954）年、六升の小麦粉で渋川の一番落差のある場所を借りてつくった今井村の源太郎の水車、用水の本流から渋川に落込む所にあって「耕地の水車」と呼ばれていたものなどです。そこでは、精米のほかに小麦粉の製粉も行われ、近隣の素麺づくりに利用されます。

また、当時中原街道と加瀬村を結ぶ道（橘樹郡道とも呼ばれた）の付近には、農業の他にもいくつかの商売があったようで、素麺屋の他に草履屋、抹香屋、足袋屋などの屋号をもつ旧農家が今でも残っていて、当時の様子を思わせます。

●右＝水車の心棒と臼が今は燈籠に。

●左＝庭石になっている石臼と挽臼。

小泉次大夫

二ヶ領用水開削の祖。駿河の国(静岡県)の生まれ。富士郡小泉郷において今川義元の家臣植松泰清の長男に生れる。初めは今川氏真に仕えていたが、今川氏の没落後、徳川家康に登用され小泉と改姓した。慶長二(1597)年家康が多摩川沿岸を巡視した時、次大夫は、「水を引き新田開発を」と家康に進言してそれが受入れられる。別名「次大夫堀」とも呼ばれる二ヶ領用水の完成後、その功績により本領の他、本田・新田のうち十分の一を給される。その後、元和五(1619)年、次大夫は、三男の吉勝に代官職を譲って妙遠寺に隠居し、元和9(1623)年八五歳で没した。妙遠寺は、用水完成の頃、廃寺同様になっていた寺を自らの手で「妙泉寺」として復興し、後に砂子(川崎区)に移して「妙遠寺」と名づけた寺で、「次大夫寺」ともいわれてる。今も市立病院裏の妙遠寺に次大夫夫婦の逆修塔が残っている。

(1539～1623)

田中休愚

二ヶ領用水中興の祖。武蔵の国多摩郡平沢村(現在の東京都秋川市)に生まれる。絹の行商でしばしば川崎を訪れるうち、当時の川崎宿の本陣をつとめる田中兵庫(三代目)の養子になり、名主・問屋役も兼帯した。そして川崎宿の窮状を救うため六郷川の渡船権を獲得、その収入で宿の復興と繁栄をもたらした。さらに、自からの経験をもとにまとめた幕府の民政に対する意見書である『民間省要』が八代将軍吉宗の認めるところとなり、多摩川、酒匂川の改修にあわせて、「二ヶ領用水の改修」の命を受けた。休愚は享保九(1724)年に、荒れ果てていた二ヶ領用水の改修に着手。宿河原取入れ口を改修し、また総延長約三十二キロにわたる用水全体の「大ざらい」を行なって用水の姿を元によみがえらせた。享保一四(1729)年、三万石の代官に抜擢されたが惜くも、五ヶ月後に江戸・浜町で没した。

(1662～1729)

⊙参考文献

稲毛川崎二ヶ領用水事績●山田蔵太郎■稲毛川崎二ヶ領普通水利組合・昭和5年
川崎誌考●山田蔵太郎■石井文庫・昭和2年
川崎市史●川崎市■同・昭和43年
川崎史話●小塚光治■多摩史談会・昭和37年～41年
閑話雑記●川崎市■島崎文教堂・昭和53年
わが町の歴史川崎●村上直■文一総合出版・昭和56年
かわさき散歩●川崎市総合文化団体連絡会■昭和55年
稲田堤の桜●角田益信■昭和52年
川崎の民俗●角田益信■昭和54年
多摩川の水利―その史的展開―(水利の開発と調整・下巻)●華山謙■時潮社・昭和55年
多摩川誌●建設省関東地方建設局京浜工事事務所■昭和61年
高津村風土記稿●上田恒三■昭和55年
二ヶ領・六郷用水建設の技術と人(クオータリーかわさき7)●西和夫■川崎市文化室・昭和60年

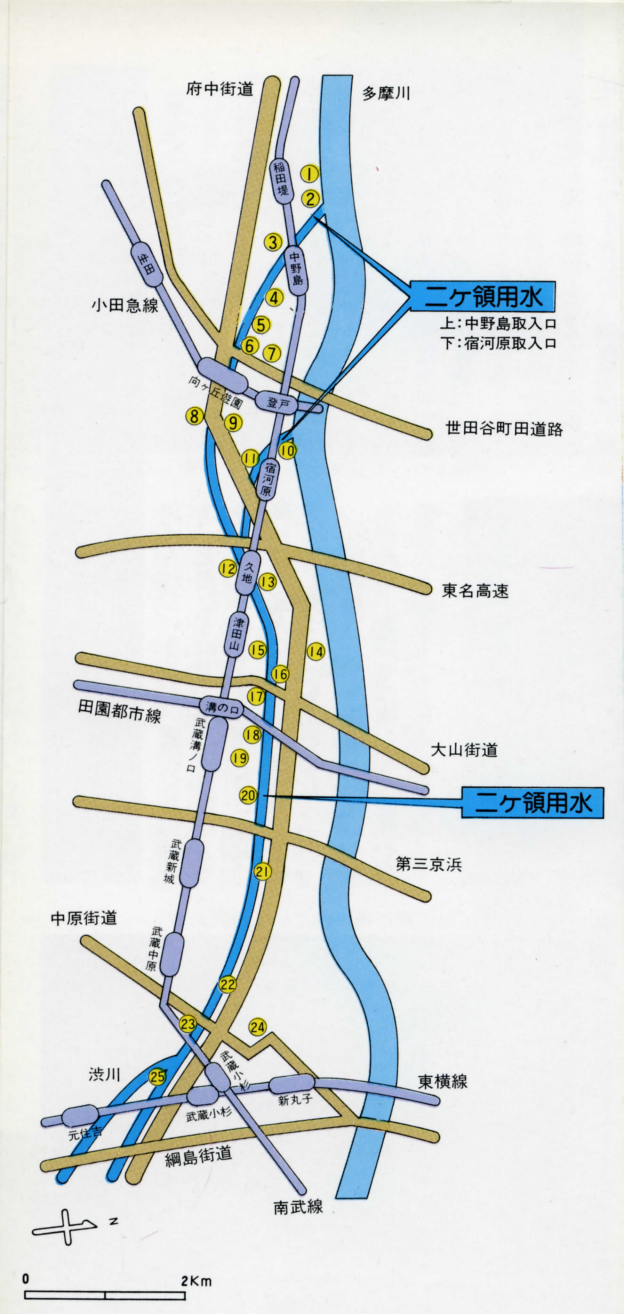
●川崎歴史ガイドのシンボル・マーク
このシンボル・マークは、古代の鏡を現わしています。歴史は私たちの祖先がつくりだしたものですが、それを再び映しだすのが、川崎歴史ガイド計画です。シンボル・マークは、歴史を甦らせ、映しだす鏡です。ガイド用の〝柱〟の上に、それが必ずついています。　デザイン＝粟津　潔

ガイドパネルデザイン＝粟津　潔＋清水まこと
Design＝粟津デザイン室　Photo＝小池　汪

◉連絡先＝財団法人 川崎市文化財団
〒210 川崎市川崎区宮本町1番地 川崎市役所文化室内
電話＝044―200―2111内2029

領価　100円

印刷＝大日本印刷株式会社　無断転載を禁ず　昭和62年3月発行



●—川崎歴史ガイドパネル所在地

① ——(B) 稲田堤の桜
② ——(B) 中野島取入れ口
③ ——大丸用水
④ ——紺屋前の堰
⑤ ——登戸付近の紙漉き
⑥ ——二ヶ領用水と小泉橋
⑦ ——榎戸の堰
⑧ ——川崎の地酒
⑨ ——長尾の天然氷
⑩ ——宿河原取入れ口
⑪ ——宿河原の桜並木
⑫ ——久地合流点
⑬ ——鷹匠橋
⑭ ——久地の横土手
⑮ ——(B) 円筒分水
⑯ ——溝口・二子宿の間屋跡（丸屋）
⑰ ——二ヶ領用水と大石橋
⑱ ——雁追橋
⑲ ——南田の堰
⑳ ——石橋供養塔
㉑ ——八ッ目土と水道水源地
㉒ ——高元寺と寺子屋
㉓ ——二ヶ領用水と神地橋
㉔ ——小杉陣屋と次大夫
㉕ ——渋川と水車

※ (B)……Bパネル　その他はCパネルです。

二ヶ領用水ルート

Bパネル❶稲田堤の桜

相模原線
けいおう
いなだづつみ
多摩川
なかのしま
409号線（川崎府中線）
南武線
小田急線
のぼりと
東名高速道路
生田浄水場
多摩区役所
むこうがおか
ゆうえん
しゅくがわら
緑化センター
モノレール
二ヶ領用水
ケーブルカー
総合教育センター
ふたこしんち
つるやま
たかつ
市立小中学校
高津区役所
みぞのくち
田園都市線
南武線
二ヶ領用水
等々力緑地
第三京浜国道
むさししんじょう
むさしなかはら
しんまるこ
むさしこすぎ
中原区役所
東横線

0　500　1000m

Cパネル⑭鷹匠橋

■川崎歴史ガイドパネル所在地

❶—稲田堤の桜
❷—中野島取入れ口
❸—大丸用水
❹—紺屋前の堰
❺—登戸付近の紙漉き
❻—二ヶ領用水と小泉橋
（兼　津久井道と枡形城址ルート）
❼—榎戸の堰
❽—川崎の地酒
❾—長尾の天然氷
❿—宿河原の取入れ口
⓫—宿河原の桜並木
⓬—八幡下の堰と五ヶ村堀
⓭—久地合流点
⓮—鷹匠橋
⓯—久地の横土手
⓰—円筒分水
⓱—溝口・二子宿の問屋跡（丸屋）
（兼　大山街道ルート）
⓲—二ヶ領用水と大石橋
（大山街道ルート）
⓳—雁追橋
⓴—南田の堰
㉑—石橋供養塔
㉒—八ッ目土と水道水源地
㉓—常楽寺と春日神社
㉔—高元寺と寺子屋
㉕—二ヶ領用水と神地橋
（兼　中原街道ルート）
㉖—渋川と水車

（㉘は合本のみに掲載；現地に当財団のガイドパネルはたっていません）